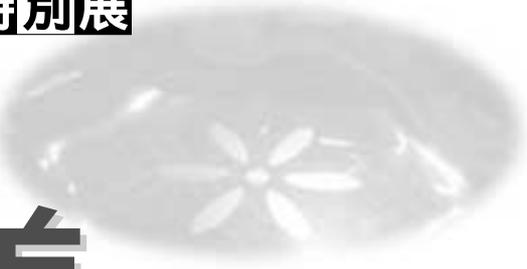


たくみのやかた

工匠館第8回特別展

漆の美

前田 仁の世界
入場無料



かんしつてつぎぬりじきろう
乾漆鉄錆塗食椀



かんしつぬのめもりき
乾漆布目盛器



かんしつかしき
乾漆菓子器



かんしついつかんばりもりき
乾漆一閑張盛器



かんしつききょうかしき
乾漆桔梗菓子器

下町文化

NO. 230
2005.7.11

発行
江東区教育委員会
生涯学習部生涯学習課
〒135-8383
江東区東陽4-11-28
TEL.(03)3647-9819
<http://www.city.koto.lg.jp/>

工匠館第8回特別展

漆の美 - 前田仁の世界

工匠壺番館展示替え

八百八町調査隊

大江戸を掘る!

芭蕉記念館新展示

武家の文人 - 風流のなかで... -

囲炉裏ばた 「友の会」研修会報告

江東歴史紀行 幻の柿本人麻呂社

写真展

「区民が写したふるさと江東」

『江東古写真館

～ 想い出のあの頃へ～』増刷

会期 9月10日(土)～18日(日)
会場 工匠壺番館 (たくみにばんかん)
午前9時～午後5時
(森下文化センター内、森下3 12 17)
工匠壺番館では特別展を開催します。今回は、区登録無形文化財(工芸技術)保持者である前田仁さんの漆芸作品を展示いたします。

前田仁さんは、昭和10年に豊島区に生まれ、26年に漆工職人である父千代松さんに師事して修業を積み、千代松さんとともに石島で仕事を続けてきました。

昭和59年に千代松さんとともに江東区の無形文化財（工芸技術）保持者として認定されて以降、江東区伝統工芸展や体験学習などを通じて漆工技術の普及に努められています。

また、昭和62年から64年にかけて日本工芸会主催の「伝統工芸新作展」および「伝統工芸漆芸展」に入選、平成元年からは日本漆工協会「漆の美展」に毎回出品をするなど精力的に創作活動を続けています。9年に優秀漆工技術者として表彰を受け、その受賞作品を桂宮殿下に献上、14年には東京都優秀技能者知事賞を受けるなど、その技は広く認められています。

展示室には、半世紀を超える時を技の研鑽に注いできた前田さんの作品が数多く展示されています。どうぞ、ごゆっくりとご観賞ください。

実演公開 9月11日（日）・17日（土）・18日（日）の午前10時～午後4時までの間に行います。

体験・シャーペンに漆をぬろう！

実演公開日に行います。教材費要。申込みは直接会場にて。

漆とは

漆は、ウルシノキから採取された樹液、すなわち天然の材料です。日本では、古く縄文時代から塗料あるいは接着剤として使われてきました。

漆独特のなめらかで美しい塗り肌や色彩は人々を魅了し、また堅牢ではげにくいばかりではなく、酸・アルカリ・塩分・アルコールなどの薬品に侵されないことから、今日までに多くの器や工芸品が生み出されてきました。

漆液が採取できる木は、日本・中国・朝鮮半島・インドシナ半島などに広く分布しています。各風土で漆液の性質や色彩が違い、それぞれの特徴を生かした塗りや飾りが行われています。日本・中国・朝鮮半島で生育しているのがウルシノキで、上質な漆液を採取することができます。

ウルシノキ一本あたりの産出量は、成木（8～13年）でわずかに200グラム程度で、天然の漆液は非常に貴重なものとなっています。現在、国内で使用されている漆液のうち90%以上は中国産で、国内産はわずかに2%に過ぎません。漆は貴重な工芸材料となっているのです。

工程／乾漆漆器の場合

乾漆とは、石膏の型に和紙や布を漆ではり重ねて素地を作る方法です。お

もに奈良時代で仏像を作る方法に応用されていました。

乾漆素地の製作

型製作 漆器の型を石膏で作ります。**切粉付け** 石膏の型に素地が剥がれやすいように剥離剤を塗り、切粉を2回付けます。切粉は地の粉と砥の粉を混ぜて漆を加えたものです。

地付け 切粉が乾燥すると、空研ぎ、地付けを2回繰り返しします。地は地の粉と漆を混ぜたものです。

紙着せ

糊と漆を混ぜて作った糊漆を塗って、薄い和紙と厚めの和紙を地付けの上にそれぞれ数回着せま



紙着せ

布着せ 麻布を着せま

る石膏をはずします。

けると、縁は完成します。**錆付け** 砥の粉とセシメ漆を混ぜて作った錆を付けます。

錆固め

研いだ後、セシメ漆を擦り込んで固めます。

漆塗り

素地が完成したら、塗りに入ります。中塗り・衣塗り・上塗り・摺漆と、塗るたびに、風呂に入れて漆を乾燥させ、乾いた後に研いでいきます。そして菜種油を漆器に付け、ツノ粉を付けた布で磨き、最後に菜種油を手のひらに付け鹿のツノ粉を使って磨きあげます。



磨きあげ

展示構成

漆とは／塗料にするために（漆の精製）／前田仁氏年譜／作品展示／工程／乾漆漆器の場合／実演公開／漆塗り体験／記録ビデオ上映

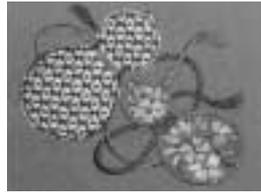
展示替え

森下文化センター（森下3 12 17）
2階、工匠番館では、天野一政氏の作品（縫紋）と岩崎清二氏の作品（表具）を新たに展示しました。

縫紋は、家紋などの紋章を刺繍する技術で、江戸時代初期から一般的になったといわれています。縫紋はあまり目立たないように刺繍するのがよいとされ、様々な刺繍の縫い方が用いられています。展示では、伝統的な縫紋の数々と最近多く用いられるようになってきた装飾的な紋を紹介しています。



つた



ひさご

天野一政氏は、大正12年生まれ。昭和11年に渋谷区恵比寿の刺繍職人渋谷仙太郎氏（つた屋）へ弟子入りし、技術を習得しました。平成元年に江東区登録無形文化財（工芸技術）保持者として認定、同16年に指定されました。

表具は、和紙や布を貼り合せて掛軸・巻物・屏風・襖などを製作する技術です。経典や書画を保護、装飾する

事からはじまり、日本においても千年以上の歴史があります。現在でも多くの文化財にその技術を見ることができま

ます。展示では、書を張り交ぜた屏風と墨画の掛軸がご覧いただけます。



表具

岩崎清二氏は、大正13年生まれ。地元境町（茨城県）の表具師石崎愛之助氏のもとで技術を習得しました。平成13年に江東区登録無形文化財（工芸技術）保持者として認定されました。

工匠番館

【開館時間】 午前9時～午後5時

【休館日】 毎月第1・3月曜日

【入場料】 無料

【交通】 都営新宿線・大江戸線森下駅下車 徒歩10分

【問合せ】 江東区教育委員会文化財係

深川体験わーるど

7月17日（日）森下文化センターで深川体験わーるどが開催されます。深川の歴史や伝統工芸にふれる絶好の機会です。どうぞお出かけください。

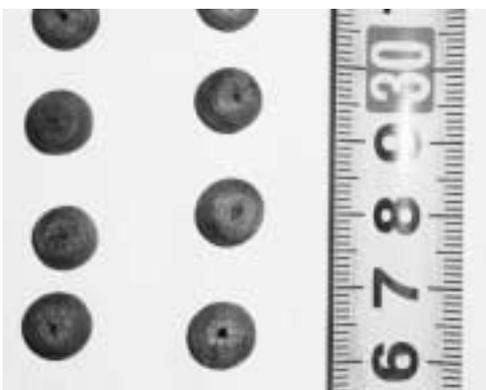
八百八町調査隊

大江戸を掘る！

「発掘された墓」というと、どんな想像をするでしょうか。エジプトのミイラ？ それとも古墳の玄室に描かれた壁画でしょうか？ どちらも古代のロマンや神秘性を感じますね。では、「江戸時代のお墓」ならどうでしょう。ちょっと怖い感じがしませんか？ そう思ってしまうのは、現代と江戸時代との接点が多いからです。その割には分かっていないことも多いのです。ということで、今回の調査は「お墓」です。江戸時代の寺院や墓地の調査は、江東区ではまだ少ないのですが、その一例を紹介しましょう。

区内のある場所から2基の墓が発見されました。いわゆる「早桶」と呼ばれる、高さ52cm、直径56cmほどの円形木棺の中に座った状態（座葬）で埋葬されていました。もちろん2基とも土葬です。江戸時代の墓は、従来の研究では都市部は火葬が一般的と言われていましたが、江戸遺跡の発掘調査が増えるにつれて、土葬が多くを占めることが分かってきました。

被葬者はともに女性でした。1号墓の被葬者は骨の発達や磨耗などから、



1号墓から出土した木製数珠

16～20歳代の女性で、さらに歯にお歯黒が残っていたことから、既婚者であることが分かります。2号墓の被葬者については現在調査中ですが、骨からは性別や年齢、身長だけでなく、かつていた病気が分かることもあります。副葬品は、1号墓から木製の数珠と、六道銭と思われる寛永通宝2枚が出土しました。どちらも江戸時代のお墓から出土するものとしては一般的なものです。「三途の川の渡し賃」とも言われている六道銭は、必ずしも6枚というわけではなく、多いものでは10枚を超えることもあります。副葬品はこのほかに、生前に愛用していた茶碗や煙管、子供では人形や玩具と一緒に埋葬されている例もあり、年齢や性別、個人の嗜好が分かるだけでなく、埋葬をした人の想いも伝わってきます。

武家の文人

—風流のなかで—

平成17年12月18日(日)まで

芭蕉記念館(常盤1 6 3)では、武家の人々が残した和歌や俳句、書簡など104点をとりあげた「武家の文人 風流のなかで…」展を開催しています。

武家は、鎌倉以来徳川の終焉に至るまでおよそ800年にわたって、政治の表舞台で中心的役割を担ってきた。しかしその影には、さまざまな興亡の歴史があり、その命運の中にあつて、武家は和歌や俳句などの文芸をたしなんでもいました。

武家にとって、学問や文芸などの教養は武芸にも劣らず大切なものでした。

主家は、家臣に対して素養や力量を示す手段とし、また武家社会にとどまらず、身分を越えた交流を図ることも、「家」を保ち守るためには必要不可欠なものであつたといえます。そのため、武士は子弟を熱心に教育しました。その教育の場が寺や藩校などの機関でした。そこでは階層などによって学ぶ度合いは異なりますが、読み書き、和

歌・連歌の手ほどきや古典の精読など、多くを学んでいました。たとえば、武士の江戸における俳諧は、江戸在府を義務付けられた武士の気晴らしとして始まり、家臣や家族など家中を巻き込み、日夜句会にふける中で、しだいに俳諧が広まっていききました。そして、江戸中後期には文芸が身分を越えて大衆化していくことになりました。

展示では、室町時代から幕末維新期に活躍した武士の作品をとりあげています。なかには、武士でありながら、歌人・俳人・学者として大成した者も多くいました。特徴的な作品としては、武家としてより文芸に励み大家といわれた山崎宗鑑の「風雨」書幅や松永貞徳の書状(伝)、豊臣秀頼筆色紙や(伝)淀殿筆短冊、また早くに戦乱の世を読み取り、足利・織田・豊臣・徳川家につき従つた細川幽斎の短冊等があります。幕末維新期では、「幕末の三舟」と

呼ばれた勝海舟・高橋泥舟の短冊、蘭学者・画家として知られた渡辺華山の「嵐雪肖像」などがあります。



山崎宗鑑「風雨」書幅

さらに、出雲母里藩主松平直興(四山)・信濃松代藩主真田幸弘(菊貫)といった大名俳人の俳句や国学者として活躍した本居宣長とその養子大平の和歌をしたためた短冊など、さまざまな立場にあつた武家の作品を展示しています。

これらの作者の背景を思い浮かべながら、ご鑑賞してみたいかがでしょうか。

(中村保名)



(右)勝海舟短冊
(左)高橋泥舟短冊

芭蕉記念館

開館時間 午前9時30分～午後5時(4時30分までにお入りください)
展示室休室 月曜日(祝日は除く)

9月6日(火)～9日(金)ノ9月13日(火)～16日(金)

入館料 大人100円(団体70円)小中学生50円(団体30円)*団体は20名以上
交通 都営地下鉄新宿線・大江戸線森下駅下車 徒歩7分

問合せ ☎03(36631)1448

「友の会」研修会報告

6月14日(火)午前9時30分に旧大石家住宅を出発したバスは、一路午前中の研修地である狛江市「むいから民家園」(狛江市立古民家園)をめざし、午後には世田谷区の「次大夫堀公園民家園」に向かいました。研修会は、区外の古民家を見学し、保存活動に対する知見を広めることで、旧大石家の保存活動に生かすことを目的としています。また、訪れた両民家園は、普及活動にも積極的に、その点でも研修会は大変意義あるものになりました。

1、むいから民家園

この民家園には、小田急線複雑々線化の影響で、移築を余儀なくされた旧荒井家住宅の母屋一棟が建てられています。



むいから民家園

す。平成3年に取り壊された同家は、当初より市民の保存運動に支えられてきました。市民を中心とした保存への取り組みは、解体・調査の実施、解体家屋の部材保管、さらに復原に際する行政とのワークショップ開催など、平成14年に開園するまで市民が主導的役割を担ってきました。その後の保存のための管理・運営も市から委託された「狛江市立古民家園運営市民協議会」が行っています。普及活動も活発で、「民家園だより」など広報紙の作成や、子どもを対象とした宿泊体験や朗読会をはじめとするさまざまな取り組みが見られます。これらの行事を通して、昔の狛江や暮らしを知る機会を提供しています。

このように市民主導型の保存・普及のため、さまざまな問題を「協議会」で対処しなければならぬのは大変でしょうが、多くの市民に親しまれ、幅広い事業ができるのも、このタイプの特徴といえそうです。

2、次大夫堀公園民家園

この民家園は、近くの岡本公園民家園とともに、世田谷区によって管理・運営されています。園内には、名主屋敷1棟、民家2棟、その他土蔵・消防小屋と火の見櫓・表門が移築され、次大夫堀(六郷用水)も再現されています。

す。この次大夫とは、このあたりの代官で農業用水を開発した小泉次大夫のことです。

さて、民家園では「民家園ボランティア」が藍染め・糸つむぎ・鍛冶・そば打ちなどの民家園教室を行ない、それに伴う、藍や綿、そばの栽培もボランティアが行っています。その他、年中行事、子どもの昔遊びなどの行事が開催され、昔なつかしい遊びや手仕事の体験を通し、来園者と民家園の掛け橋となっています。



次大夫堀公園民家園

このように、保存・管理は区で、普及活動は民間ボランティアに託された形となっており、園のテーマである「生きている古民家」の推進にボランティアが重要な役割を担っていることがわかります。

3、研修を終えて

以上の二ヶ所は、それぞれボランティアの役割が普及活動を中心に幅広く、

来園者との接点ともなっていました。旧大石家の場合、保存を主眼におきつつも、秋の特別公開や年中行事など普及活動に取り組んできました。その中心に「旧大石家住宅友の会」があるわけです。

今回の研修先では、それぞれに、出発点や運営方法・規模などの違いはあるものの、古民家の保存に対する積極的な姿勢は同じボランティアとして共感するところも多く、古民家の保存と活用する方法、展示の手法など面白いへん興味深く見学してきました。また、民家園が子どもから大人まで楽しめる、世代を越えた交流の場として活用されている姿や、ボランティア主体のサークル活動は、古民家保存のボランティアのあり方として、感じるところや手本となるところも多くあったようです。今後、この研修の成果を生かし、旧大石家住宅友の会の活動に反映させていけることと思います。

旧大石家住宅友の会

平成8年の旧大石家住宅移築当初より区民を対象に保存ボランティア「旧大石家住宅友の会」を組織。住宅の維持・管理にあたる。「友の会」に関する問い合わせ・入会希望は、教育委員会生涯学習課文化財係まで。

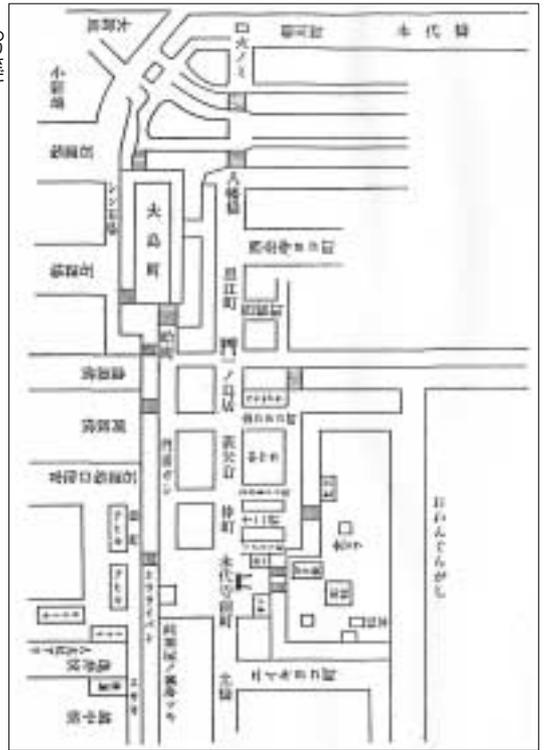


図 「寛天見聞記」

ちなみに津和野藩内の高津（現島根県益田市高津町）は人麻呂終焉の地とされ、領内における人麻呂社の総社とされ、現在でも地元の崇拝を受けています。

人麻呂社の様子と庶民の参詣

それでは人麻呂社の当時の様子を覗いてみましょう。

まず、亀井氏邸の表門（北側）から入って左の門をくぐり、数十歩先に四斗樽の3倍もある銅製の手水鉢が置かれていました。その傍らには手拭い懸けがあり、江戸の名だたる呉服商や吉原の太夫、役者などが奉納した手拭いが幾筋となく掛かっていたそうです。

そこから右手を数十歩行くと、絵馬堂と拝殿がありました。絵馬堂は長さ4間×幅2間で、神楽堂を兼ねていました。拝殿は2間×3間で北向きに建ち、その奥に本社があり、そこには7〜8寸（約23〜26cm）の木像の人麻呂像が安置されていました。

人麻呂社は本社、拝殿から絵馬堂に至るまで、赤い光沢のある瓦で遠くから目立つ建物であったそうです。この赤瓦は津和野の名産で、普通の黒瓦より堅く、水漏れもない良品でした。

江戸の瓦より値段は張りますが、亀井氏は領国よりこの赤瓦を取り寄せ、人麻呂社に使っていたのです。

亀井氏邸の人麻呂社は毎月18日に門を開き、広く一般庶民の参詣を許していたことは先に述べましたが、とりわけ人麻呂の命日とされる3月18日には「殊に群集」したそうです。拝殿の左には座敷を設け、庭を眺めながら休憩できるようになっていました。さらに庭も自由に巡ることができ、南の方にある芝山では、男女は海上の絶景を眺め、子供は「俵転」（横臥して山上からゴロゴロ転がる遊び）や角力や「追缺競」（追い駆けっこ）をして広々とした大名庭園を満喫したそうです。

屋敷神の社には珍しく人麻呂社には常駐の神主がいました。津和野藩の藩校の学頭（教授）大國隆正という国学者の日記によれば、隆正の父がこの人麻呂社の神主を務めており、隆正はこの屋敷で国学の勉強をしたそうです。「遊歴雜記」には筆者の敬順が官番にすすめられて、詩を詠んでおり、文人が集い、交流していた様子がうかがえます。

「深川浜屋敷」と人麻呂社の終焉

このように江戸の庶民から信仰を受け、多くの人々が訪れた人麻呂社ですが、天保末期頃に亀井氏邸が売られるとともに、別の屋敷に移されました。亀井氏は「深川浜屋敷」を売ったお金で領国にある藩校養老館を増築する費用に充てました。そして、亀井氏からこの地を買取ったのが、桑名藩主（元白河藩主）松平氏です。松平氏は亀井氏の屋敷地を「松平定信海荘」（区登録史跡）の敷地に加えしました。定信海荘の池に浮かぶ中の島には人麻呂が祀られており、亀井氏邸の人麻呂社を勧請した可能性もあります。

亀井氏の「深川浜屋敷」の人麻呂社を含め、大名屋敷の屋敷神は現在あまり残っていません。明治維新を経て、江戸から東京になり、大名の屋敷が工場などにかわっていく過程で、これらの屋敷神は姿を消していったのです。

（文化財専門員 赤澤春彦）



「柿本人麻呂像」（国立国会図書館）

『区民が写したふるさと江東』

開催のお知らせ



なつかしい昭和30年ごろの写真を集めて写真展を行います。

会期 平成18年2月1日(水)～10日

(金)午前8時30分～午後5時
(1日・8日は午後7時まで。

10日は午後4時まで)。4日・

5日は休みとなります。

会場 江東区役所2階区民ホール

入場料 無料

開発がいちじるしい江東区は、刻々と風景が移り変わってきています。かつて親しんだ風景は、もうみなさんの心の記憶と写真の中にしかありません。その点、写真を見れば当時の様子がまたたくまにみえがえってきます。

そのため、文化財係では昔の江東区内を写した写真を集め、郷土を知るための資料として保存しています。そして、写真展の



開催や写真集の出版を通して、みなさんにご紹介し、ふるさと江東の移り変わりをご覧いただいています。

昔の写真をお持ちですか？
写真展に出品してください！

2月に予定しているこの写真展では、

みなさんが写した写真もあわせてご紹介したいと思えます。また、写真を撮った当時の思い出もお寄せ下さい。



写真とともにご紹介したいと思います。募集要領は次の通りです。

募集するもの

昭和40年以前の江東区内を撮影した写真。

お借りした写真は複写してお返しいたします。

写真を写した当時の思い出(400字詰め原稿用紙使用。ワープロでも可。字数制限はありません)。原稿はお返ししませんのでご注意ください。

応募方法

区役所文化財係(6階11番)まで持参あるいは郵送(宛先は1頁参照)。

応募締切

平成17年11月14日(月)必着。

大好評につき再増刷

『江東古写真館』

『想い出のあの頃へ』

昨年10月に刊行して以来、大好評のうちには版を重ねた『江東古写真館』を、このたびご要望にお応えして再増刷しました。



『江東古写真館』は、昭和30～40年代を中心とする古写真約90点を集めた写真集です。映画館、都電、ノリ干し、金魚池、田園、木場といったなつかしいふるさと情景がそこにあります。現在の様子を撮った写真と見比べることで、風景の移り変わりもわかります。とくに開発いちじるしい臨海地区の写真などをご覧になれば、その変化の大きさにおどろかれることでしょう。

巻末には資料編として、年表、人



口・面積・物価のデータ、電車案内図(昭和32年)、江東区詳細図(昭和30年)などを載せました。写真とともに年表や物価

の移り変わりを見ると、よりいっそう当時の様子がうかがえて、たいへん面白いと思います。

また、資料として載せた電車案内図はよく知られたものですが、昭和32年版はあまり刊行物に載っていないのではと思います。さらに、写真のなかには都電が写っているものがある点もあり、都電好きにはたまらないと思います。

本書を手に入れたら、あらためてふるさと江東について語り合ってみてはいかがでしょうか。ぜひおすすめいたします。



頒布価格 1000円(A4版96頁)

頒布場所 文化財係(区役所6階)・

広報広聴課(同2・4階)・芭蕉記

念館・深川江戸資料館・中川船番所

資料館・各文化センター。

郵送の場合 現金書留にて、書名を明

記し、現金1000円と切手340円(送料分)を文化財係宛にお送り下さい(宛先は1頁に記載されています)。到着次第、送本します。